

・白選五十一首・



吉岡生夫

よしおか・いくお 1951年、徳島県生まれ。龍谷大学文学部仏教学科卒業。「短歌人」および「鱧と水仙」同人。歌集は『草食獣』から『草食獣 第五篇』まで五冊。そのほか、『草食獣への手紙』『辞世の風景』『セレクション歌人31・吉岡生夫集』がある。近鉄文化サロン枚方および京都講師。

はじめてのくちづけをへてあふぐときどこかでいつかみた空がある

浴衣きてうつくしかりし日のことをわすれず 忘れたしとつたへよ

外套の雪を払ひて立つしばスコット大佐にわれはあらぬを

無頼にもなりきれざれば右の肘するどく曲げて突く赤き玉

チエーホフに疲れて昼を眠るかな「小役人の死」をかほに被せて

食堂に遅き昼食とるわれは一部始終をみられてをりぬ

はめられし壁の鏡を歩みゆくひとりをわれと知るまでのとき

また負けてきたる力士は名を変へて戦はすのみ紙相撲ゆる

もどりくるひとなどなきにちらほらとふる夜の雪に家族はなやぐ

刺客なき一世淋しむぬるき湯に義朝おもひマラーをおもひ

みかんの袋のすぢを丹念にとらねばならぬ小心のこと

『草食獣』

『続 草食獣』

『勇怯篇 草食獣・そのⅢ』

「生涯一捕手」。背番号十九番、南海ホークスの野村克也が好きだった。「草魂」。背番号一番、近鉄バファローズの鈴木啓示（けいじ）が好きだった。在阪のバ・リーグである。

歌集は家集。一九七九（昭和五十四）年に第一歌集『草食獣』を出したが、一方で漠然とではあるが歌集は生涯一冊という固定観念が芽生えていた。一九八三（昭和五十八）年に第二歌集『続 草食獣』を出した。「続」はどうだろうという心配してくれる声もあったが振り切った。周囲も次があると考えていたのだろう。だが一九八八（昭和六十三）年、また草食獣でと言ったときはあせんとしたところだろう。それでも奥書には「勇怯篇 草食獣・そのⅢ」となっている。まだ引き返せる

吸殻を拾ひてをりぬわれわれからわれへともどるスト終へしあと

一男と一女の父となりしかば降る蟬しぐれ挽歌のごとし

連休の終はる夕べを無精髭のびし顎まで湯につかりゐる

一八〇度股をひろげし兄ちゃんがバイク走らす世紀末へと

ワン・タッチの傘をひろげてゆかむかな男の花道には遠けれど

エ、ウソ、ホント、隣席の他社のOLこそかはゆけれ

ブラインドのかげがあたりて人物をだるまおとしのごとくに見する

サブマリン山田久志のあふぎみる球のゆくへも大阪の空

愛愛愛愛愛と八月の波打ちぎはを走るカニたち

水中にありておもはゆ目も鼻も口もうごきてゐむふくわらひ

それはこんな顔だつたかいとふりむきし女のやうな茹卵むく

タコあげに来しがいつしか子らの散り広場にわれのたこあげてゐる

みづからの尾よりのみこみはじめたる蛇のすがたのあとかたもなし

ピストルの鳴りてとびこむ足裏が揃ひて見する濃淡の差を

青雲の志にも似てネクタイを風に吹かるるデッキに立てば

記帳して「吉岡生夫」その生はシンメトリーをはつか乱しぬ

かみさまも裏側ゆゑにせはしくて縫目のあとのしるき陰囊

明日よりは生きむ四十も水槽の鯡と鰯ほどの差ならむ

うつくしく日本国憲法ありし世を伝へおかまし秋のつばくろ

いちけしてにけしさんけしよんけして小芥子の淡き表情がごと

【草食獣 第四篇】

余地を残しておいてくれたのである。團伊玖磨の「パイプのけむり」のように「続々」「又々」と続けたら、とは永井陽子の言だった。かくて一九九二（平成四）年の第四歌集「草食獣 第四篇」、一九九九（平成十二）年の第五歌集「草食獣 第五篇」と続く。さいこの「草食獣 隠棲篇」は未完だが、タイトルが変更になることはおそらくないだろう。

こだわりの、もう一つは「饒舌の時代だからこそ、作品は汚されることなく、黙って無条件で読者の前に屹立（まがた）してもらいたいのである」（「草食獣への手紙」）。体力も気力も充実していたに違いない。「勇怯篇 草食獣・そのⅢ」「草食獣 第四篇」は「続 草食獣」と同じく一ページ一首組みであるが、これに加えて目次もないし、あとがきもない。

「草食獣 第五篇」のときは病後で体力も気力も心もとなかった。したがって方針転換、選歌の段階から影山一男氏（修書房）の助けを借りることになった。一ページ二首組み、目次もあり、あとがきもある。

こだわりに対する未練はある。だが作品のできる契機はさまざまである。自分の歌が読者に届いているのかどうかも気になるところである。仕切り直して新生「草食獣」呱呱（こゝろ）の声をあげたいと思っている。

夢は、簡素な生涯一冊の歌集「草食獣」。

【草食獣 第五篇】

ペコちゃんを遠くみてゐるしポコちゃんの暗く切なき少年の季^{とき}

永年勤続表彰受くる身となりぬ「以下同文」のごとき人生

新渡戸稀造ひとりなれども派遣しぬエジプトに木を植うる基金へ

おろしがねにすられゆくとき大根の不思議はつひに声あげずけり

計四回頭を下げて窓側の三人掛けの席にもどりぬ

日のさせばうらうらとして夢みりあるいは錯覚としての晩年

すでにして生命保険の勧誘の対象外の身体と知りぬ

親指と人差し指でつかみたる蛇のあたまに似るコンセント

死なばわが遺すものあり丈低き親より丈の低きふたり子

のぞむらく二人子なれば喧嘩せずよき仕事得よよき伴侶得よ

たいざうかいたいざうまんだら湯に入りて荒井注氏のおもむくところ

春となれば耳てふ耳もひらひらと花をもとめてとんでゆくのだ

手にかこふほたるのひかりなかぞらに尾をひくひかり草生のひかり

しきしまのやまとのくにの携帯のメールの文字よ立ちあがれかし

をのこまたをみなおなじく水泳のガッツポーズの腋に毛のなし

うしなひし歳月たとへばふたり子のいとけなかりし日の秋の空

高円宮は保険に入つてゐるのかと母が言ひたりテレビを見つつ

女性専用車両に隣る車両にも女性を乗せてうごきだしたり

木津川を左にみては右にみてちかづく伊賀は霧こきところ